

「カインの苦悩と救い」

創世記 4章1～16節

聖学院小学校・幼稚園チャプレン/聖学院大学非常勤講師 濱田 辰雄

わたしたちの人生にはしばしば、理不尽と思える出来事に遭遇いたします。何の悪いことをしていないのに不幸な出来事に見舞われたり、誤解されていわれない中傷を受けたり、また他の人はとても恵まれているのに自分だけは不幸な境遇・環境に置かれていると感じられるようなこと、そういうことが時々あります。そういう時にわたしたちは神さまに問うてみたくなります。いったいどうしてですか？と。

今日与えられたみ言葉にあるカインもそういう気持ちだったと思います。弟アベルと一緒に神さまに捧げ物をしたとき、神さまはアベルの捧げ物の方に目を留められカインの方には目を留められなかったのです。しかもその理由については何も書かれていません。「目を留められた」というのは「喜ばれた」とか「祝福される」という意味が含まれています。ですからカインは神さまはアベルだけを愛して自分のことは愛して下さっていないと感じたことでしょう。カインのその思いは神さまに差別をされていると感じられていったのかもしれませんが。聖書によると神さまに対して怒りの感情を持ち始めたようです。6節に神さまの言葉が紹介されています。「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしおまえが正しいのなら、顔をあげられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

これに対してカインは、この怒りを抑えることができずついに弟アベルを殺すことになってしまいました。それは神さまの言われた通りに罪を支配することが出来なかったということになります。私たち人間にとって「理不尽な現実・不条理な現実」は私たちが罪の世界へと向かわせる大きな原因となります。私たちは罪から逃れるためには、この不条理な現実をどうしても乗り越えなければなりません。

この視点で聖書を読み進めて行きますと聖書全体がこの問題と取り組んでいることがわかります。まずヨブ記がその代表です。ヨブは正しく完全な信仰の持ち主であったのに、子どもたちがみんな殺されてしまい財産もみんな失われてしまいました。しかもその上に自身も全身重い皮膚病に冒され見るも無残な姿になってしまいます。そばにいた彼の妻はあまりのひどさに「神をのろって死になさい」と言います。これに対してヨブは初めこそ「主は与え、主は取りたもう。主の御名は誉むべきかな」とか「われわれは神から幸いを受けるのだから災いをも受けるべきではないか」と言って罪の誘惑を退けていました。しかし見舞いに来た3人の友だちと議論する内、自分がどうしてこんな目にあわされたか神のみ心が分からない、という苦悩を告白していきます。また預言者エレミヤも望まない預言者にされた上、同胞に向かって厳しいさばきばかりの預言をしなければならなくなり、「ああ、私の頭が水となり、私の目が涙の泉となればよいのに」と苦しい胸の内を告白しております。そして「どうして悪人の道が栄え、不信実な者がみな繁栄するのですか」と神さまに激しく問いかけています。さらにやはり預言者のヨナは大都市ニネベに裁きの預言をするよう命じられた時、ヨナはそれを断って遠くの方へ逃げ出して行きます。それはヨナが預言をした結果ニネベの人々が悔い改めたら、神さまはさばきをするのを

思い返して赦される事を知っていたからです。ヨナはそんな無意味な預言はしたくなかったのです。しかし結局神さまには逆らえずニネベに行って預言活動をすることになります。そうしたらヨナの予想した通りニネベの人々が王から始まって全ての人々が罪を悔い改め神さまはニネベを滅ぼすことを思い返されます。そこでヨナは神さまのその対応に対して激しく怒ります。そして改めて神さまにニネベを滅ぼすことを要求します。それは神に従う民ユダヤの重大な問いかけでした。

最後に新約聖書からも一つ取り上げてみたいと思います。新約聖書にはあまりこのような問いかけは出てきませんが、決定的な言葉が主イエスの十字架上でうめきです。それはマタイ福音書とマルコ福音書に記されている「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」といううめきです。「神の子が神に見捨てられた」、これほど不条理なことがあるでしょうか。

このように聖書全体が「神の不条理の問題」と取り組んでいます。しかし残念なことにどこの箇所でも直接的な答えは記されていません。それはわたしたち一人一人が聖書を参考として自ら回答を見つけて行くしかないので。その意味でもう一度創世記 4 章を読み直していきたいと思います。はたして本当に神さまはカインが感じていたようにアベルだけを愛してカインをないがしろにされていたのでしょうか。わたしにはそうは思えません。それはその証拠として一番はっきりしているのが、カインが犯した罪を恐れて周りの人々に殺されるでしょうと言った時、神さまは決してそうならないように一つのしを与えたとおっしゃっているからです。(15 節)これは決して神さまがカインをないがしろにはしていない一番の証拠です。そしてカインが主の前を去ってエデンの東に移った後、結婚し「町を建てる者」(17 節)となっていきます。ここには悲劇的な様子はかけらもありません。カインは子どもにも、孫にも恵まれます。このあたりの記述は神さまに愛されているカインというイメージしか浮かんでできません。それにこの物語の全体を見ると殺されたアベルこそ不幸な人生ではなかったでしょうか。カインだけがないがしろにされたとはとても言えないと思います。

そして最後にもう一つカインが本当は神さまにとっても愛されていたということを示すみ言葉を読みたいと思います。それは 1 節のイブの喜びの告白です。イブはこのように言っています。「わたしは主によって男子を得た」これこそカインが神さまに愛されてこの世に生まれてきた証拠ではないでしょうか。

私たちには多くの場合神さまの本当の御計画、御旨は分からないことが多いのです。特に不条理な現実と直面した時にそうなります。そして怒ったり、悲しんだり、絶望したりしてしまいます。しかし神さまの御愛は「隠されて」います。私たちは信仰を持ってその隠されている神さまの御愛を見つけ出さなければいけません。そのために真剣に祈り、真剣にみ言葉に聞いていきたいと思えます。どんな苦しい現実にも必ず神さまの御愛が隠されています。不条理を超えて生き、その恵みを証してまいりましょう。

2013 年 6 月 6 日 聖学院大学 全学礼拝